

統語構造地図に基づく関係代名詞節の分析：試案

著者名(日)	本多 正敏
雑誌名	言語科学研究：神田外語大学大学院紀要
巻	16
ページ	75-104
発行年	2010-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000954/

統語構造地図に基づく関係代名詞節の分析 —試案—

本多 正敏

要旨

本論文の目的は、新しい生成文法の枠組みの一つである統語構造地図 (the cartography of syntactic structures) に基づき、英語の制限的・非制限的關係代名詞節の構造を明らかにすることである。具体的には、非制限的關係代名詞節では、① speech-act 副詞、② 付加疑問文、③ 否定倒置文、④ 場所句倒置文が生起可能であるのに対して、定名詞句を主要部とする制限的關係代名詞節内部では、これらの表現が容認されないという問題に取り組む。その上で、統語構造地図の枠組みで中核的・周辺的副詞節の分析を行っている遠藤 (2009a, b) の分析に基づき、英語の制限的・非制限的關係代名詞節それぞれに異なる構造を与え、問題①～④を解決するにあたり、統語構造地図の枠組みが有用であることを示す。最後に、本研究の分析に関連し、今後の課題を整理しながら、統語と談話の接点と節研究に対する今後の展望を述べる。

キーワード：関係代名詞節、統語構造地図、否定倒置文、付加疑問文、speech-act 副詞

1. はじめに —副詞節と関係代名詞節の特徴を中心に—

英語の関係代名詞節 (以下、関係節) は、一般的によく知られているように、制限的・非制限的用法の区別がなされている。¹ 具体例を以下に見る。

- (1) a. The girl {who / that} wrote the book is a friend of mine. (制限的)
- b. The bag, {which / * that} was black, contained some books and papers. (非制限的)

(1a) は制限的關係節の例である。ここでは、先行詞が定名詞句 the girl であり、人を指す先行詞に対応して關係代名詞 who が用いられている。また、括弧内に示されるように、who の代わりに that を用いることもできる。一般的に、制限的用法では、關係節により主名詞の指示対象が限定される。一方、(1b) は非制限的關係節の例である。ここでは、物を指す先行詞に対応して關係代名詞 which が用いられている。制限的用法とは異なり、ここでは which の代わりに that を用いることはできない。また、關係節の前にはコンマが置かれ、口語体では音調の切れ目がある。この非制限的用法では先行詞の状態や性質などが挿入的・付加的に叙述される。

初期の生成文法の枠組みにおいて、關係節や動詞の補部節等は、話者の断定 (assertion) を示すのか、それとも旧情報を示す前提 (presupposition) を示すのかで区別がなされた (Aissen 1975; Hooper & Thompson (以下、H&T) 1973)。この節の断定性・前提性の区別をする一つの基準となる構文が否定倒置文である。

- (2) a. I exclaimed that never in my life had I seen such a crowd.
(H&T 1973: 474)
- b. *He was surprised that never in my life had I seen a hippopotamus.
(*ibid.*: 479)
- c. This car, which only rarely did I drive, is in excellent condition.
(*ibid.*:489)
- d. *The car that only rarely did I drive is in excellent condition. (*ibid.*)

上記 (2a, b) は、否定倒置文が動詞 exclaim の補部である断定的 CP 内には生起可能であるが、叙実動詞 surprise が補部とする前提的 CP 内では生起不可であることを示している。² 同様に、(2c, d) は、否定倒置文が非制限的關係節内部では生起可能であるが (2c)、制限的關係節では生起不可であることを示す (2d)。

近年の生成文法の発展に伴い、上記の補部 CP や関係節以外に、副詞節の考察も進められてきている（遠藤2009a, b; Haegeman 2003 and subsequent work）。統語構造地図の枠組み（第2節参照）に基づく Haegeman (2003 and subsequent work³) の副詞節研究では、副詞節は中核的 (central) なものと周辺の (peripheral) なものに分かれ、それぞれが異なる統語的特徴を持つことが明らかにされてきている。

- (3) a. 中核的な副詞節：主節の表す事象を修飾／限定する；主節と共に一つの発話の力を持つ。
b. 周辺の副詞節：主節の背景を表す；主節と独立した発話の力を持つ。
(遠藤 2009b: 99)

この中核的・周辺の副詞節の具体例を以下に見る。

- (4) a. John always works best while his children are asleep. [中核的副詞節]
(Haegeman 2003: 329)
b. John studied at Oxford, while Bill has a Cambridge Ph.D.
[周辺の副詞節] (*ibid.*)

上記 (4a) の中核的副詞節の場合、while 節は時の解釈（～間）を持ち、「子どもが寝ている間は、いつも最もよく仕事はかどる」というように、主節事象の成立時が時の while 節の内容によって限定されている。他方、(4b) の周辺の副詞節の場合、while 節は「～だが一方 (whereas と同様)」という対比的意味を表し、(4a) で見たような主節事象の成立を限定する意味解釈（時間的な結び付き等）は存在せず、主節と while 節は互いに独立して主張をしている。このように、中核的・周辺の副詞節はその解釈で異なる。

上記 (3a, b) の中核的・周辺の副詞節の区別に関して、これらの副詞節はそれぞれ異なる統語的振る舞いを示す。その一つが、Cinque (1999) の高階層副詞 (high adverb) が副詞節内部に生起できるかどうかである。

(5) Cinque (1999) の副詞階層

[*frankly* Mood_{speechact} [*fortunately* Mood_{evaluative} [*allegedly* Mood_{evidential}
[*probably* Mod_{epistemic} [*once* T (Past) … (以下省略)

(6) a. *I didn' t drop the class because frankly I didn' t like it, I dropped it
because it was too expensive. [中核的]

(Haegeman 2006: 1655)

b. [A referendum on a united Ireland] … will be a 'good thing', because
frankly they need to be taken down a peg and come down to earth
and be a little bit more sober in their approach to things' .

[周辺の] (Guardian, 22.7.2 p. 4, col 4)

(6a) が示すように、中核的副詞節 (because 節) 内部で speech-act 副詞が生起できないのに対して、周辺の副詞節 (because 節) 内部では speech-act 副詞が生起できる (6b)。この副詞節内部における speech-act 副詞の生起の違いは、制限的・非制限的關係節においても観察される (Emonds 1979; 梶田 1969)。

(7) a. *The only paper that, frankly, I didn' t understand was hers.

[制限的]

b. John, who, frankly, was incompetent, was a friend of mine.

[非制限的]

(7a) が示すように、制限的關係節内部において speech-act 副詞 *frankly* は生起不可であるが、非制限的關係節内部においては生起できる (7b)。

上記 (6a, b) と (7a, b) では中核的・周辺の副詞節や制限的・非制限的關係節が、節内部で speech-act 副詞が生起可能かどうかで違いがあることを見た。この違いに加え、副詞節内部の主語に対応する付加疑問文が可能かどうかでも中核的・周辺の副詞節、制限的・非制限的關係節で異なる。次の例を見る。

- (8) a. *John had to be careful with his money while his daughter was a student, wasn't she? [中核的] (Haegeman 2003: 330)
 b. Bill took a degree at Oxford, while his daughter is studying at Cambridge, isn't she? [周辺の] (*ibid.*)

(8a) の中核的副詞節を含む例文において、副詞節内部の主語に対応する付加疑問文は形成されない。一方、周辺の副詞節を含む例文 (8b) においては、副詞節内部の主語に対応する付加疑問文が形成される。同様に、制限的・非制限的關係節の例を見る。

- (9) a. *I just ran into the girl who was your roommate at Radcliffe, wasn't she? [制限的] (H&T 1973: 490)
 b. I just ran into Susan, who was your roommate at Radcliffe, wasn't she? [非制限的] (*ibid.*)

(9a) において、制限的關係節内部の主語に対応して付加疑問文を形成することはできない。一方で、(9b) においては、非制限的關係節内部の主語に対応して付加疑問文を形成することができる。

これまでに、中核的・周辺の副詞節と制限的・非制限的關係節内部における speech-act 副詞の生起、付加疑問文の生起関係を見てきた。その関係は以下のようにまとめられる。

(10) 中核的・周辺の副詞節、制限的・非制限的關係節の統語的特徴

	中核的副詞節	周辺の副詞節	制限的關係節	非制限的關係節
Speech-act 副詞	×	○	×	○
付加疑問文	×	○	×	○

上の表から、中核的副詞節と制限的關係節、周辺の副詞節と非制限的關係節がそれぞれ類似した統語的・談話的特徴を持っていることは明らかである。

さらに、制限的・非制限的關係節内部の特徴に焦点を当てると、(2d, c) で見た否定倒置文の生起に加えて、場所句倒置文の生起に関しても違いがある。

- (11) a. *The car that only rarely did I drive is in excellent condition.
 (H&T1973: 489) (= (2d))
 b. This car, which only rarely did I drive, is in excellent condition.
 (ibid.) (= (2c))
- (12) a. *The rotunda in which stands a statue of Washington will be repainted. (H&T 1973: 489)
 b. The rotunda, in which stands a statue of Washington, will be repainted. (*ibid.*)

(11a, b) は (2d, c) の再録であり、既に述べたように、否定倒置文は制限的関係節内部では生起できない。同様に、(12a, b) は、場所句倒置文が非制限的關係節では生起できるが、制限的關係節では生起できないことを示している。このように、倒置構文の生起によって制限的關係節と非制限的關係節は区別される。これらの特徴をまとめると、下記の表のようになる。

(13) 制限的關係節・非制限的關係節の統語的特徴

	制限的關係節	非制限的關係節
否定倒置文	×	○
場所句倒置文	×	○

以降では、統語構造地図の観点から (10) の特徴を中心にして制限的・非制限的關係節の構造を提案する。そして、提案した構造に基づき、(13) の制限的・非制限的關係節における倒置構文の生起の違いが正しく予測されるか検証していく。

本稿の構成は次の通りである。第2節で、統語構造地図の枠組みにおける Split CP 仮説、A-bar 連鎖形成と素性に基づく Relativized Minimality (以下、RM)、Criterion Freezing (以下、CF) 原理を説明する。第3節では、Haegeman (2003, and subsequent work) の副詞節分析を洗練させている遠藤 (2009a, b) の分析を採用しながら、(10) の特徴を考慮しつつ、制限的・非制限的關係節の構造を提案する。第4節では、提案した關係節の構造に基づき、

当てはめると、補文標識 *che* は最初に *Fin* に生起して文の時制を「定性」として表示した後、*Force* へ移動して文タイプを「断定 (assertion)」として表示する (Rizzi & Shlonsky (以下、R&S)2007)。

(14)の Split CP 仮説が英語にも当てはまるという点については、Rizzi (1997, 2007) では *wh* 主語疑問文の摘出を中心として、Radford (2004) においては補部 CP や関係節内部での話題化・否定倒置文の生起を中心として議論がなされている。また、英語の特定の構文に着目すると、Rizzi & Shlonsky (以下、R&S) (2006) では場所句倒置文、Rizzi (1997) や Radford (2004) では否定倒置文の分析が行われている。これらの分析については、以降 (= 2. 3) で見ていく。

2. 2 A-bar 連鎖と Relativized Minimality (RM)

既に見たように、Split CP 仮説では Topic や Focus といった談話位置が想定されている。これらの位置に topic/focus 要素が移動する際には A-bar 連鎖が形成され、この A-bar 連鎖は移動する位置に関わる素性によって区別される (Rizzi 2004)。以下では、この点を詳細に見ていく。

Rizzi (1990) では、A 位置・A-bar 位置・主要部の観点から RM が提案された。この RM は Rizzi (2004) において素性の観点から洗練されており、この素性に基づく RM は下記のように示される。

(16) The feature-based RM

- a. X_F Y_F → $Y_F X_F$ t
 b. X_F Z_F Y_F → * $Y_F X_F$ Z_F t

(16b) が示すのは、主要部 *X* と要素 *Y/Z* が同じ素性 *F* を持つ場合、RM 違反によって *Y* の移動連鎖形成は介在要素 *Z* により阻止されることを示している。一方、介在要素 *Z* が存在しない (16a) では、*Y* の移動連鎖は RM 違反を引き起こさない。

上記 (16) 中の素性 *F* に関して、下記のように素性の自然類 (natural class) として quantification や topic に関わるもの等がある (Rizzi 2004)。⁵

- (17) i) Quantificational: Wh, Neg, measure, focus…
ii) Topic (Rizzi 2004: 243)

(17) に基づく、Focus への移動により Quantificational A-bar 連鎖（以下、Q A-bar 連鎖）が形成される。この連鎖のメンバーには、wh 要素・否定辞・measure 副詞・focus が含まれる。一方、Top への移動により Topic A-bar 連鎖（以下、Top A-bar 連鎖）が形成され、この連鎖メンバーには topic のみが含まれる。これら二つの連鎖は異なる素性から成る A-bar 連鎖であり、基本的には互いに干渉することはない。⁶

(16) と (17) で示した素性に基づく RM の具体例を見る。

- (18) RAPIDAMENTE i tecnici (*non) hanno risolto il problema.
“RAPIDLY the technicians have (not) solved the problem”
(Rizzi 2004: 235)

上の例では、副詞 *rapidamente* が焦点化を受け、Q A-bar 連鎖が形成されている。この例において、仮に否定辞が生起すると非文となる。これは、否定辞と焦点副詞が同じ Q の素性類に属し、副詞の焦点移動に伴う連鎖形成において否定辞が介在要素となるためである。次に別の例を見る（例中の下線部は筆者による）。

- (19) Speravo proprio che potessero sbarazzarsi rapidamente di questo problema, ma devo dire che, *rapidamente*, non lo hanno risolto.
“I really hoped that they could rapidly get rid of this problem, but I must say that, *rapidly*, they didn't solve it” (*ibid.*: 236)

ここでは、副詞 *rapidamente* が第一文で用いられており、第二文では同じ副詞が話題化要素として補部節内の先頭位置に生起している。この場合、文中に否定要素（下線が引かれた要素）が現れても文法的である。これは話題化を受けた副詞が topic の部類に属している一方、否定表現は Q 部類に属しており、

副詞の移動連鎖形成において否定表現が介在要素とはならず、RM 違反を免れているためである。

これまでに Rizzi (2004) の素性に基づく RM を見てきた。これは、3. 1で見える Haegeman (2003 and subsequent work) の副詞節分析を発展させている遠藤 (2009a, b)、及び本研究で提案する関係代名詞節の分析の基盤となるものである。次に、Criterial Freezing (以下、CF) 効果について見る。

2. 3 Criterial Freezing (CF) 効果

2. 2では統語構造地図の枠組みにおける A-bar 連鎖の形成に関わる概念として素性に基づく RM を見てきた。その他、A-bar 連鎖の移動元と移動先の関係性について CF 原理が提案されている。

(20) Criterial Freezing: A phrase meeting a criterion is frozen in place.

(R&S 2007: 118)

この原理によると、動詞の項などが談話に関わる位置へ A-bar 移動を受けると、その位置からさらに移動することができなくなるとされている。具体的に次の例を見る。

(21) a. What did you buy ~~what~~?

b. ... [_{FocP} What did ... [_{TP} you buy ~~what~~]] ?

(21a) では目的語 wh 句が動詞 buy により選択される位置に生起した後、A-bar 位置の FocP 指定部へと移動し、Q A-bar 連鎖が形成される (21b)。この談話位置で wh 句は、CF 効果により移動ができなくなる。この点を次の例で詳細に見る。

(22) a. Mi domandavo quale RAGAZZA avessero scelto, non quale ragazzo.

'I wondered which GIRL they had chosen, not which boy'

(R&S 2007: 117)

- b. *Quale RAGAZZA mi domandavo — avessero scelto, non quale ragazzo
'Which GIRL I wondered they had chosen, not which boy' (*ibid.*)

(22a) において、間接疑問文中の wh 句は間接疑問文内部でとどまっており、さらに、対比焦点解釈を持つ。ここでは、wh 句は wh 素性と対比焦点素性の二つを有しており、間接疑問文中でこの二つの素性が照合・削除されていると考えられる。一方、(22b) において、同じく対比焦点を持つ wh 句は間接疑問節内部から主節へと移動している。派生としては、関節疑問文内で wh 素性を照合・削除した後、主節で対比焦点素性を照合・削除しているが、この派生は CF 効果により阻止される。

この CF に基づくアプローチは、Focus や Topic といった談話的位置から主語へと広げられている (R&S 2007)。下記の抜粋から分かるように、GB 理論における拡大投射原理 (EPP) は CF の観点から捉えられており、Focus や Topic といった談話的位置と同様に、名詞句が SubjP へ移動すると、CF 効果によってさらに別の位置への移動は不可能になるとされている。

- (23) a. Classical EPP, the requirement that clauses have subjects, can be restated as a criterial requirement, the Subject Criterion, formally akin to the Topic Criterion, the Focus Criterion, the Q or Wh Criterion, etc.... (R & S 2007:116)
b. The subject criterion: [_{SubjP} DP [_{Subj} XP]]

この Subj Criterion に関わる議論の一つとして、下記の wh 疑問文における Subject Auxiliary Inversion (以下、SAI) の非対称性が挙げられる。

- (24) a. What do you like?
b. Who likes the book?

一般的に知られているように、(24a) の目的語に対応する wh 句の抽出の際

に SAI が起こる一方、wh 句の抽出の際には SAI が起こらない。R&S (2007) の提案では、SAI は FinP の主要部に併合 (merge) される動詞的 Fin_[+V] によって引き起こされる (25a)。

- (25) a. [_{ForceP}... [_{FocP} what ... [_{FinP}... [_{Fin} did Fin_[+V] [_{SubjP} you [_{Sub} [_{TP}...]]]]]]]]]
 b. [_{ForceP}... [_{FocP} who ... [_{FinP}... [_{Fin} Fin_[+N] [_{SubjP} [_{Sub} [_{TP} ~~who~~ ...]]]]]]]]]

一方、SAI が起きない (24b) においては、動詞的 Fin_[+V] ではなく名詞的 Fin_[+N] が併合され、これが Subj Criterion を満たす (25b)。⁷ その結果、TP 内部から wh 句は Subj Criterion による CF 効果を引き起こすことなく、FocP へと移動することができる。

以上、統語構造地図の発展に伴って CF 原理が Topic や Focus といった談話的位置から主語にも適用されてきている点を見てきた。また、SAI が動詞的 Fin_[+V] により引き起こされる点、Subj Criterion を満たす方法として名詞的 Fin_[+N] を Fin 主要部に併合する手段があることを見てきた。これらのアプローチは倒置構文の分析にも生かされており、Rizzi (1997) や Radford (2004) では否定倒置文の分析が、R&S (2006) においては場所句倒置文の分析が提案されている。以下では、詳細には触れないが、それぞれの構文の分析を以下で簡単に見ていくこととする。

まず、統語構造地図に基づく否定倒置文の分析を見る。

- (26) a. Seldom did Mary drive the car.
 b. [_{CP} Seldom [_C did [_{TP} Mary ... drive the car]]]

上の否定倒置文の例 (26a) において、前置した否定表現に倒置した did が後続している。GB 理論の観点から考えると、否定倒置文には SAI と否定要素の倒置が関与するため、(26b) のような構造をしていると考えることができる。否定要素の移動先については、統語構造地図の観点からは Rizzi (1997) や Radford (2004) において FocP であると提案されているが、助動詞倒置が派生に含まれる点に関してはその詳細が述べられてはいない。⁸ ここでは、R&S

(2007) の提案に従い、否定倒置文における SAI は FinP 主要部に併合 (merge) される動詞的 Fin [+V] によって引き起こされるとする。概略、否定倒置文は以下の派生過程をたどる。

(27) a. 動詞的 Fin [+V] の併合による SAI

[_{ForceP} ... [_{FocP} [_{FinP} [_{Fin} did_i [Mary t_i seldom drive the car]]]]]]

b. FocP 指定部への否定要素の移動

[_{ForceP} ... [_{FocP} Seldom_j [_{Foc} [_{FinP} [_{Fin} did_i [TP Mary t_i t_j drive the car]]]]]]]]

上の派生過程では、動詞的 Fin [+V] が併合され、SAI が起きる (27a)。その後、否定表現が FocP へ移動する (27b)。否定倒置文に関して、本稿ではこの派生を採用する。

次に、R&S (2006) の場所句倒置文分析を見る。場所句倒置文の分析上、主な焦点になるのは拡大投射原理 (EPP) がどう満たされるかという点である。⁹ これに関連し、場所句倒置文の大きな特徴の一つは、話題化要素と共通して、前置した場所句 PP が文頭の that 節内部や ECM 構文の埋め込み節内部に生起できない点である。

(28) a. *That in the chair was sitting my old brother is obvious.

(Stowell 1981: 272)

b. *That this book, Bill liked is obvious. (*ibid.*)

(29) a. *I expect [in the room to be sitting my old brother] . (*ibid.*: 271)

b. *I expect [this book Bill to like] (*ibid.*)

この点に着目し、R&S (2006) において、場所句 PP が Topic 位置へ最終的に移動する派生が想定されている。¹⁰ 概略、その分析は以下のように示される。

(30) [_{ForceP} ... [_{TopP} PP_{Locj} [_{FinP} [_{FinP} t_j [Fin+_{Loc} [_{SubjP} [_{Sub} [_{TP} t_i [T+_{Phi} [_{VP} ... V DP t_j]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]

上の派生では場所句が最終的に TopP へ移動しているが、これは Fin 主要部に併合された名詞的 Fin の一種、名詞的 Fin _[+Loc (ative)] により可能となっている。つまり、名詞的 Fin _[+Loc] によって Subj Criterion が満たされ、場所句は SubjP の指定部へ移動して CF 効果を引き起こすことなく、FinP 指定部を経由して TopP へ最終的に移動することができる。本稿でも、この場所句倒置文分析を採用する。

この節で見てきた要点を整理すると以下のようなになる。

- (31) ① CF 原理は、Topic/Focus といった談話位置から主語にも適用されてきており、拡大投射原理は Subj Criterion として捉えられている。
- ② Subj Criterion を満たす手段は二つある。
- I) DP を SubjP の指定部へ移動する。
 - II) 名詞的 Fin _[+N] を FinP 主要部に併合する。
- ③ SAI は FinP 主要部に併合される動詞的 Fin _[+V] によって引き起こされる。

これらの要点に基づく倒置文の分析もこの節で見た。第4節ではこれらの倒置文の分析を踏まえ、第3節で提案する制限的・非制限的關係節の分析から倒置文の生起が正しく予測されるかどうか検証する。

3. 分析



3.1 遠藤 (2009a, b) の副詞節分析

前節では、統語構造地図の枠組みから (I) Split CP 仮説、(II) 素性に基づく RM、(III) CF 原理を見てきたが、これらに基づき、Haegeman (2003, and subsequent work) の分析を発展させている遠藤 (2009a, b) の副詞節分析を以下で詳細に見ていく。

遠藤 (2009a, b) では Haegeman (2003, and subsequent work) の中核的・周辺的副詞節の分類とその分析に着目し、付加疑問文の生起に空演算子の ForceP への移動が関与し、Force タイプの連鎖が形成されると提案している。¹¹ この提案に基づき、第1節で見た問題がどのように解決されるか考察する。以下に例を再録する。

- (32) a. *I didn' t drop the class because frankly I didn' t like it, I dropped it because it was too expensive. (Haegeman 2006: 1665) (= (6a))
 b. [A referendum on a united Ireland] … will be a 'good thing', because frankly they need to be taken down a peg and come down to earth and be a little bit more sober in their approach to things' . (Guardian, 22.7.2 p. 4, col 4) (= (6b))
- (33) a. *John had to be careful with his money while his daughter was a student, wasn' t she? [中核的] (Haegeman 2003: 330) (= (8a))
 b. Bill took a degree at Oxford, while his daughter is studying at Cambridge, isn' t she? [周辺の] (*ibid.*) (= (8b))

(32a, b) は speech-act 副詞が周辺の副詞節では生起可能であることを示す。(33a, b) は従属節内の主語を対象とした付加疑問文が周辺の副詞節では生起可能であることを示す。これらのデータに対する遠藤 (2009a, b) の分析を以下に示す。

- (34) a. [ForceP (主文) … [~~ForceP (FinP) (中核的) … [ForceP Op 付加疑問要素]]]~~

 b. [ForceP (主文) … [ForceP (周辺の) … [ForceP Op 付加疑問要素]]]


(34a) において中核的副詞節の ForceP は欠落しており、節は構造として FinP として分析されている。¹² (34b) において、周辺の副詞節は ForceP を持つと分析されている。これらの分析の下で、(32) と (33) のデータは次のように説明される。まず、speech-act 副詞についてだが、これが ForceP の存在により生起が認可されるという仮定の下で、中核的副詞節では ForceP が欠落しているため speech-act 副詞が生起できない (32a)。一方、周辺の副詞節では ForceP が存在しているため、speech-act 副詞の生起が可能である (32b)。次に、

付加疑問文について、遠藤 (2009a, b) ではこの生起に空演算子の ForceP への移動が関与すると提案されている。(34a) の場合、中核的副詞節では ForceP が欠落しており、空演算子の移動は不可能であるため、この節内の主語を対象とした付加疑問文は生起できない (33a)。一方、(34b) の場合、周辺の副詞節は ForceP を持ち、空演算子の移動が可能であるため、この節内の主語を対象とした付加疑問文が生起できる (33b)。

上で見た遠藤 (2009a, b) の分析の中心になる点は、Haegeman (forthcoming) の分析とも共通するが、基本的に付加疑問要素の生起が ForceP の存在に依存している点である。そして、この依存関係を空演算子の移動と結び付けていると考えられる。代案として、この ForceP への依存関係に対して演算子移動を仮定せず、主節 ForceP が付加疑問要素を束縛認可するという考え方もできる (cf. Culicover 1992)。付加疑問文には主節要素に対応する代用表現 (主節主語に対応する主語代名詞、助動詞、省略されているゼロ形の述部要素等) が生起するが、その代用表現が主文 (ForceP) の束縛により認可されるという考え方である。以下の形状を見る。



(35a) では中核的副詞節内部に ForceP が欠落しているおり、ForceP による付加疑問 ForceP との束縛関係が成立せず、付加疑問要素の生起が認可されない。一方、(35b) では周辺の副詞節内部に ForceP があり、これが付加疑問 ForceP を束縛することによって付加疑問要素の生起が認可される。¹³

ここでは、遠藤 (2009a, b) の空演算子移動に基づく周辺の・中核的副詞節の分析を見た。また、この分析の代案として、空演算子移動を仮定せず、主節 ForceP による束縛関係により付加疑問 ForceP の生起が認可されるという分析を提案した。つまり、付加疑問文の分析については (空演算子の) 移動と束縛

に基づくものの二つがあることになるが、これら二つの分析の妥当性については、3.2で制限的・非制限的關係節の派生と合わせて検討することとする。

3.2 関係代名詞節

第1節で見たように、制限的關係節と中核的關係節は類似した統語的特徴を持つ。

(36) 中核的・周辺の副詞節、制限的・非制限的關係節の統語的特徴

	中核的副詞節	周辺の副詞節	制限的關係節	非制限的關係節
Speech-act 副詞	×	○	×	○
付加疑問文	×	○	×	○

上の表から分かるように、制限的關係節内部では speech-act 副詞や副詞節内の疑問文が生起できない。関連する例を以下に再録する。

- (37) a. *The only paper that, frankly, I didn't understand was hers. (= (7a))
 b. *I just ran into the girl who was your roommate at Radcliffe, wasn't she? (H&T 1973: 490) (= (9a))

本稿では、これらの特徴を捉えるにあたり、制限的關係節と周辺の副詞節が基本的に同じ内部構造を持つとし、ともに FinP であるとする。¹⁴ 構造を以下に図示する。

- (38) a. the man {who / that} Mary kissed
 b. [_{DP} the [_{RelP} man [_{ForceP} —... [_{FinP} who man [_{TP} Mary kissed ~~who~~ man]]]]]]
 c. [_{DP} the [_{RelP} man [_{ForceP} ... [_{FinP} [Fin that [_{TP} Mary kissed man]]]]]]]]

關係節の分析について Kayne (1994) の繰り上げ分析を採用し、主要部名詞句が直接移動すると仮定する。また、その移動先は RelativeP (以下、RelP) であると仮定する (cf. Rizzi 2009)。この RelP は Rizzi (2009) の提案に基づ

くものだが、本稿ではその構造的な位置は主要部 D により選択される位置であるとする。そして、RelP は FinP を補部を選択し、制限的關係節の ForceP は欠落しているものとする。(38b) の關係節演算子を伴う場合、DP の who man が FinP 指定部へ移動し、その後名詞句 man が RelP へと移動する。(38c) の演算子を伴わない場合、概略、名詞句 (あるいは DP) man が RelP 指定部へ移動する。尚、(38c) の man がどのような構造 (例えば、關係節演算子の役割を果たすゼロ形の D を含む構造 $[_{DP} \Phi [_{NP} man]]$) であるかについては今後の課題とする。

この分析の下では、ForceP が欠如しているため、ForceP に依存して生起する speech-act 副詞が生起できない事実が正しく捉えられる (37a)。また、付加疑問文が生起できない事実についても同様に説明される。空演算子移動を仮定した分析に基づくと、ForceP が欠如しているために演算子の移動が不可能であり、派生は破綻する (37b)。ForceP による付加疑問要素の束縛認可分析の下でも、ForceP が欠如しているため、付加疑問要素の生起ができないことが正しく捉えられる (37b)。

一方、非制限的關係節は周邊的副詞節と同様の特徴を有しており、speech-act 副詞が生起可能であり、また、副詞節内部の主語を対象とした付加疑問文も生起可能である。関連する例を以下に再録する。

(39) John, who, frankly, was incompetent, was a friend of mine. (= (7b))

(40) I just ran into Susan, who was your roommate at Radcliffe, wasn't she?
(H&T 1973: 490) (= (9b))

これらの統語的特徴を考慮し、次のような非制限的關係節の分析を提案する。

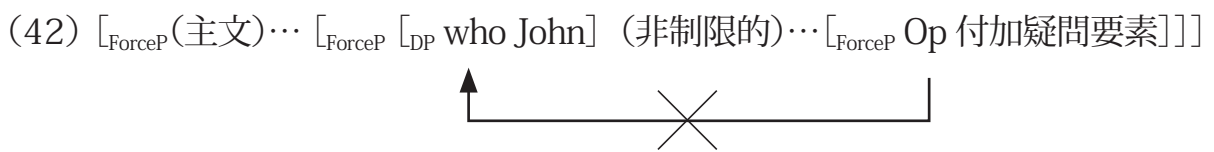
(41) a. John, who Mary kissed

b. $[_{DP} [_{RelP} John [_{ForceP} who John \dots [_{FinP} [_{Fin} [_{TP} Mary kissed who John]]]]]]]$

ここでは、關係節演算子を含む DP の who John が TP 内から ForceP 指定部へ移動し、John が最終的には RelP へ移動すると仮定する。この構造においては、

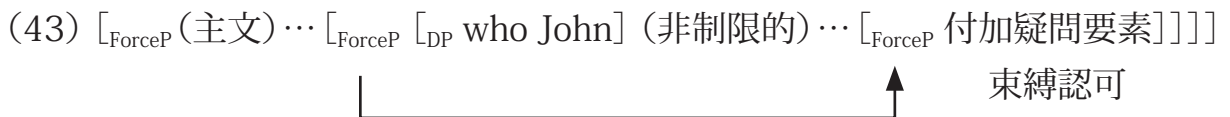
周辺の副詞節と同様に ForceP が存在している。従って、非制限的關係節内部で speech-act 副詞の生起が許される事実が正しく捉えられる (39)。

付加疑問要素の生起の分析に関しては、遠藤 (2009a, b) をそのまま採用すると何らかの修正が必要となると思われる。付加疑問要素の生起を考慮すると、(41b)の構造では付加疑問文中の空演算子の移動先である ForceP 指定部が [DP who John] で埋まっている。図示すると以下のようなになる。



上の図が示すように、関係節演算子を含む DP と付加疑問要素の演算子の移動位置はともに ForceP であるため、二つの演算子が移動する位置が重複してしまっている。

他方、本稿で提案した代案である ForceP による束縛認可分析では演算子移動を想定しない。従って、上で見た演算子の移動位置に関わる問題は生じない。



ここでは、関係節演算子を含む DP が ForceP 指定部に移動し、ForceP が付加疑問 ForceP を束縛することが可能なため、付加疑問要素の生起が認可されている。

以上では、遠藤 (2009a, b) に基づく制限的・非制限的關係代名詞節の分析を見てきた。遠藤 (2009a, b) の分析をそのまま採用すると、関係節・付加疑問文演算子二つが移動する位置に関して問題が生じることを見た。また、ForceP による付加疑問 ForceP の束縛分析ではこの演算子の移動位置に関わる問題は生じないことを見た。以降では、代案として提示した付加疑問文の ForceP による認可分析を採用する。しかし、上で見た演算子の移動位置に関する問題は、遠藤 (2009a, b) における付加疑問文の演算子移動分析の根幹に影響を与えるものではないと思われる。従って、付加疑問文の演算子分析と束

縛分析のどちらが妥当であるかの検証については今後の課題としたい。

次節では制限的・非制限的關係節の分析を踏まえ、次節ではこれらの節内部での倒置文の生起が正しく予測されるかを検討する。

4. 予測と問題

4.1 予測：制限的・非制限的關係節内部における倒置文生起

これまでに、speech-act 副詞・付加疑問文が生起を中心として、制限的・非制限的關係節の分析を行ってきた。第1節では、これらに加えて、倒置文の生起が制限的・非制限的關係節の区別をするのに重要であることを見てきた。その関係は次の図表と例によって示される。

(44) 制限的關係節・非制限的關係節の統語的特徴

	制限的關係節	非制限的關係節
否定倒置文	×	○
場所句倒置文	×	○

(45) a. *The car that only rarely did I drive is in excellent condition.
(H&T1973: 489) (= (2d))

b. This car, which only rarely did I drive, is in excellent condition.
(*ibid.*) (= (2c))

(46) a. *The rotunda in which stands a statue of Washington will be repainted.
(H&T 1973: 489) (= (12a))

b. The rotunda, in which stands a statue of Washington, will be repainted.
(*ibid.*) (= (12b))

ここで考慮したいのは、前節で提案した分析に基づき、これらの文法性が正しく予測されるかどうかである。再度、分析と關係節の形状を以下に示す。

(47) [_{DP} the [_{RelP} man [_{ForceP} ... [_{FinP} that [_{TP} ... ~~man~~ ...]]]]] [制限的]

- (48) [DP [RelP John [ForceP who John ... [FinP [Fin [TP ... who John...]]]]]]
 [非制限的]

既に見たように、否定倒置文・場所句倒置文の派生ではそれぞれ否定表現の FocP への移動、場所句 PP の話題化が関与することを見た (2.3を参照)。これは、下記のように図示される。

- (49) a. Seldom did Mary drive the car.
 b. [ForceP ... [FocP Seldom_j [Foc [FinP [Fin did_i [TP Mary t_i t_j drive the car]]]]]]
- (50) a. Into the room came a cat.
 b. [ForceP ... [TopP Into the room [TP ... came a cat]]].

これらの分析を合わせると、上記 (45) と (46) のデータは次のように捉えられる。まず、制限的關係節は ForceP が欠落している。従って、Topic や Focus の位置が利用できず、倒置文が生起できない。

- (51) a. *the car [ForceP ... [FocP ~~only rarely~~ ... [FinP did that [TP I ... drive ...]]]]
 b. *the rotunda [ForceP ... [TopP ~~in which rotunda~~ ... [FinP ~~in which rotunda~~ [Fin [TP ... stands a statue of Washington]]]]]

(51a) において、制限的關係節を FinP として分析しており、否定倒置要素が移動する FocP を使用することができない。(51b) において、場所句 PP に対応する關係節演算子 PP は topic の役割と關係代名詞としての役割の二つを有していると考えられる。従って、演算子は Topic 位置へまず移動するわけだが、制限的關係節内部で Topic 位置を用いることはできないため、派生は破綻する。

一方、非制限的關係節内部に倒置文が生起できる点に関して、その構造として ForceP を持つとして分析し、Topic や Focus の位置が利用可能であるとした。従って、倒置文の生起が可能であると予測される。

- (52) a. the [_{RelP} car [_{ForceP} which ~~car~~ [_{FocP} only rarely ... [_{FinP} did [_{TP}]]]]]]
 b. The [_{RelP} rotunda [_{ForceP} ... [_{TopicP} in which ~~rotunda~~... [_{FinP} in which
~~rotunda~~ [_{TP} ... stands a statue of Washington]]]]]]

(52a) では、ForceP の存在によって FocP 指定部を利用することが可能であり、否定倒置文が非制限的關係節内部で問題なく生起する。また、(52b) では、ForceP の存在によって Topic 位置が利用可能であり、關係節演算子 PP が Topic 位置へ移動し、さらに、名詞句 rotunda が RelP へ移動すると考える。ここで、關係節演算子 PP の Topic 位置への移動が CF 効果により不可能であると考えられるが、ここでは關係節演算子 PP から名詞句 rotunda が部分抽出 (subextraction) されているため、RelP への移動が可能になっていると考える (Rizzi & Shlonsky 2007)。¹⁵ 最終的に、關係節演算子は ForceP 指定部へ移動し、派生は適切に収束 (converge) する。

上述の通り、制限的・非制限的關係節内部における倒置文の生起は正しく予測される。しかし、制限的關係節に焦点を当てると、先行詞の名詞句が定・不定であるかで節内の統語的特徴が異なる。この点を次節で見ていく。

4.2 問題：制限的關係節の主要部と節内の構造について

これまでに制限的關係節が非制限的關係節とは異なる構造を持つことを示してきたが、より詳細には、制限的關係節の内部構造は關係節の主要部名詞句が定であるか、不定であるかに大きく左右される。制限的關係節内部の主要部名詞句が定の場合は、これまで見てきたように、節内での倒置文の生起は不可能である。

- (53) a. *The car that only rarely did I drive is in excellent condition.
 (H&T1973: 489) (= (2d))
 b. *The rotunda in which stands a statue of Washington will be
 repainted. (ibid.) (= (12a))

一方、不定名詞句を主要部とした制限的關係節内部では、非制限的關係節と同

様に、倒置文を含む主文現象の生起が許される (H&T (1976))。以下の具体例を見る。

- (54) a. I saw a dress which under no circumstances would I have bought.
 (H&T 1973: 490)
- b. Between the lobby and the vault is a hallway in which stands an armed guard.
 (*ibid.*)

上の例において、制限的關係節の主要部は不定名詞句 (a dress / a hallway) である。この場合、否定倒置文や場所句倒置文の生起が節内で容認されている。

このような不定名詞句を主要部とする制限的關係節の構造については、非制限的關係節と同様に、RelP が ForceP を補部とする構造を持つと仮定する。

- (55) a. $[_{DP} a [_{RelP} dress [_{ForceP} which \text{dress} \dots [_{FocusP} under no circumstances \dots$
 (= (54a))
- b. $[_{DP} a [_{RelP} hallway [_{ForceP} \dots [_{TopicP} in which \text{hallway} \dots [_{FinP} \dots$ (= (54b))

この仮定では、不定名詞句を主要部とする制限的關係節は ForceP であり、非制限的關係節と同様、Focus や Topic 等の位置が利用可能である。従って、不定名詞句を主要部とする制限的關係節内において倒置文が生起可能であることが捉えられる。

以上を踏まえ、主要部名詞句の定性に基づく制限的關係節の構造を以下に示す。

- (56) a. $[_{DP} the [_{RelP} [_{ForceP} \dots [_{FinP} [_{TP} \dots]]]]]$ [定主要部制限的關係節]
- b. $[_{DP} a [_{RelP} [_{ForceP} \dots [_{FinP} [_{TP} \dots]]]]]$ [不定主要部制限的關係節]

ここでは、定・不定の D の補部に選択される RelP が、その D の定性と連動して、それぞれが異なる補部を選択している (定の場合 D は FinP、不定の D の場合は ForceP)。そして、意味的には、FinP は前提、ForceP は断定を示すと

考える。

5. 結論と今後の課題

本稿では、Haegeman (2003, and subsequent work) を発展させた遠藤 (2009a, b) の周边的・中核的副詞節分析を基にして、制限的・非制限的關係節の分析を提案した。これらの分析に関連し、① speech-act 副詞の生起、② 節内の主語を対象とした付加疑問文の生起を見た。そして、①と②の統語現象を許すかどうかで周边的・中核的副詞節、制限的・非制限的關係節が区別されることを見た。そして、中核的副詞節と制限的關係節内部では①と②が不可能であるため、これらが FinP であると提案した。他方で、周边的副詞節・非制限的關係節では①と②が生起可能であるため、これらが ForceP であると提案した。また、この分析から制限的關係節内部での倒置文の生起不可能性と非制限的關係節内部での倒置文の生起可能性が正しく予測されることを見た。

今後の課題としては、制限的關係節が先行詞として定名詞句を取る場合と不定名詞句を取る場合で、主文現象の生起に関して節内部の統語的特徴が変わる問題を挙げた。定名詞句を先行詞として制限的關係節が取る場合は倒置文をはじめとする主文現象が生起できないのに対して、不定名詞句を先行詞として制限的關係節が取る場合は主文現象が生起できる。本稿では、先行詞の定性 (a/the) に応じて RelP が異なる補部 (FinP と ForceP のいずれか) を選択するという方向性を示した。この分析をいかに洗練させるかについては今後の課題とする。さらに、遠藤 (2009a, b) で詳細に議論されていた中核的・周边的副詞節の位置関係 (文頭を占めるか、文末を占めるか) が付加疑問文の形成に影響を与えるという問題も考慮しながら、制限的・非制限的關係節における付加疑問文の形成を詳細に考察していくことも今後の課題である。

今後の研究方針について、統語構造地図の観点から、節に関しては CP、移動に関しては A-bar 移動がより詳細に区別されるようになってきている。従来想定されていた CP 構造は統語構造地図の観点から ForceP の有無によってより区別がなされてきている。Haegeman (2003, and subsequent work) や遠藤 (2009a, b) の副詞節の研究、そして關係節の分析に取り組んだ本研究はこの流れに位置づけられる。さらに、埋め込み節内に生起可能な副詞や構文を明ら

かにすることで埋め込み節内部の構造をより詳細に考察し、埋め込み節がそれぞれどのような異なる特徴を持つかを検証することができる。この研究方針に従うことで、最終的には、統語構造と談話の接点である左端 (left periphery) の特徴をより詳細に捉えることができると考える。

謝辞

本稿は、月に一度土曜日に開催されている井上和子先生（本学名誉教授；言語科学研究センター（CLS）顧問）のCLSゼミ、長谷川信子先生（本学大学院教授；言語科学研究センター長）のご指導に基づくものである。特に、関係節の特徴に関しては、修士論文の作成時から長谷川信子先生に多くのご助言・ご指導をいただいた。本稿で用いた統語構造地図に関する知見に関しては、遠藤喜雄先生（本学大学院教授）に多くのご助言・ご指導をいただいた。また、統語構造地図を用いた研究を進めるにあたり、井上CLSゼミでは非常に多くのことを学ばせていただいた。特に、ゼミの諸先輩方（神谷昇氏、上田由紀子氏、藤巻一真氏、大倉直子氏、長谷部郁子氏、中村たか子氏）から多くのことを学ばせていただいた。この場を借りて、深く感謝を申し上げます。

注

¹ 制限的関係代名詞節の議論に関して、先行詞が定名詞句を取る場合と不定名詞句を取る場合がある。本稿において、4.2節まで、制限的関係代名詞節の先行詞を定名詞句の場合に限ることとする。先行詞が、定名詞・不定名詞である場合の制限的関係節内部の統語的特徴については、4.2節で考察する。

² H&T (1973) では、厳密には、叙実・非叙実と断定・非断定の区別から、that節をA・B・C・D・E類の5つに分けている。動詞exclaimが取るthat節はA類の[非叙実・断定]に分けられ、動詞surpriseが取るthat節はD類の[叙実・非断定]に分けられる。ここでの説明では節タイプの詳細を述べてはいないが、ここでの議論に影響はないので割愛する。詳細については、H&T (1973) を参照。

³ Haegemanによる中核的・周辺の副詞節の一連の研究については、Haegeman (2003, 2006, 2007, forthcoming) を参照。

- ⁴ 本稿では、話題位置・焦点位置をそれぞれ Topic・Focus とし、その位置へ移動する話題要素・焦点要素をそれぞれ topic・focus と表す。
- ⁵ Rizzi (2004) で提案されている自然類には、副詞をメンバーとする Mod 類も含まれている。本稿の議論にはこの点は直接的な関わりがないので、割愛する。詳細は Rizzi (2004) を参照。
- ⁶ Rizzi (2004) の素性に基づく RM に従うと、topic 要素は Top A-bar 連鎖の介在要素になると予測される。しかし、イタリア語において、この予測に反するような経験的データがあることから、topic 要素が特別な統語的振る舞いをみせると考えられている（この点については Rizzi (2004) を参照）。
- ⁷ ここでの名詞的 Fin [+N] の提案は、フランス語に見られる *que-qui* 交替に基づくものである。詳細な議論は R& S (2007) に譲るが、フランス語の主語関係節において見られる *que-qui* 交替の *qui* を *que* と *-i* (*il* と類似した虚辞的要素) の組み合わせによるものとし、この *-i* に相当するものとして英語にはゼロの名詞的 Fin [+N] が存在すると提案されている。
- ⁸ Rizzi (1997) では否定倒置文における主語抽出を中心として議論がなされている。否定要素の移動位置としては FocP が提案されているが、詳細な移動位置については、今後の検討課題でもある。Radford (2004) でも、Rizzi (1997) と同様に、否定要素が FocP に移動するとしている。これは、①否定要素に焦点が置かれ、②否定要素の前に話題化要素が現れるといった経験的事実に基づいている。関連するデータも含め、詳細は Radford (2004) を参照。
- ⁹ 場所句倒置文の場所句 PP に関しては、that-t 効果を示すなど主語としての統語的特徴を持つ点が指摘されている一方で、SAI を適用できないなど主語として統語的にふるまわない特徴も併せ持つ。
- i) *That-trace effects*
- a. It's this cuisine that we all believe {*that / ϕ } can be found in these villages.
(Bresnan 1994: 97)
- b. It's in these villages that we all believe {*that / ϕ } can be found the best examples of this cuisine.
(*ibid.*)
- ii) SAI
- a. * Did into the room walk my brother Jack?
(R&S 2006: 348)

b. * Into the room did walk my brother Jack? (ibid.)

本稿でも、R&S (2006) と同様に、場所句 PP は主語位置ではなく、Topic 位置などへ移動していると考えられる。これらの問題の解決方法の詳細については、R&S (2006) を参照。

¹⁰ R&S (2006) では、場所句倒置文における場所句 PP が対比焦点を受けるとしている。同様に、動詞後名詞句も対比焦点を受けると Bresnan (1994) は指摘している。この点も含め、場所句 PP と対比焦点の関係については Bresnan (1994) を参照。

¹¹ ここで遠藤 (2009a, b) が付加疑問文の形成に関して空演算子分析を採用している根拠は、yes-no 疑問文である。詳細は遠藤 (2009) を参照。

¹² ここでの ForceP が欠落しているとする分析は Haegeman (2003, and subsequent work) に基づくものであり、遠藤 (2009a, b) もこの提案に従っている。

¹³ 付加疑問文の派生の詳細については今後の課題とするが、遠藤 (2009a, b) と同様に付加疑問文の派生には、yes-no 疑問文と同様にゼロ演算子が関与すると考える。このゼロ演算子の存在について、Elizabethan English では yes-no 疑問文が顕在的演算子として whether を用いていたことから、これに対応するゼロ演算子が現代の英語において用いられていると考える (cf. Radford 2004: 220)。

i) Whether dost thou profess thyself a knave or a fool?

(Lafeu, All' s Well That Ends Well, IV.v)

また、SAI が付加疑問文で起きていることから、whether に対応するゼロ演算子が FocP に生起し、動詞的 Fin [+V] が FinP 主要部に併合されることで、SAI が引き起こされると考える。

ii) a. Do you like music?

b. [_{ForceP}... [_{FocP} ϕ [_{Foc} ... [_{FinP} [_{Fin} do [_{TP} you ...like music]]]]]] ?

付加疑問文に関しても基本的には ii b) のような構造を仮定し、倒置された要素と代名詞主語以外の要素が VP 削除のような形で削除されているか、あるいはゼロの VP 代用形で空所になっていると考える。

iii) a. You like her, do you?

b. ... [_{ForceP}... [_{FocP} ϕ [_{Foc} ... [_{FinP} [_{Fin} do [_{TP} you ... [_{VP} ... like her]]]]]]]]]

他に考慮しなければならない問題は、付加疑問要素の生成位置だが、これについては今後の課題とする。また、遠藤 (2009a, b) の演算子分析に基づく、付加疑問文の形成に関わる演算子が移動できない場合、変項を束縛できず、空虚な量子化 (vacuous quantification) が起きてしまい、文の派生は破綻する。しかし、代案として提示した ForceP による付加疑問文の束縛認可分析と iii) のような付加疑問文の構造を想定することも可能であると考えられる。この二つの分析のどちらが適切であるかは今後の課題としたい。

¹⁴ ここでの制限的関係節の構造についてだが、ForceP が欠落した FinP であるとする。この場合、本構造における Focus や Topic 位置の使用は、ForceP の欠落により不可能であると考えられる。

¹⁵ ここで、場所句 PP に対応する関係節演算子が直接 ForceP へ移動すると仮定すると、場所句倒置構文における場所句 PP の topic に関わる特徴が捉えられない。

ここでの subextraction の詳細については R&S (2007) を参照。具体例としては以下のものが挙げられる。

i) Subextraction

a. Gianni, [_{__} C_{REL} [non è ancora stato chiarito [[quanti libri del quale] C_Q
[siano stati censurati t_{DP}.

'Gianni, it has not been clarified yet how many books by whom have been censored'

(R&S 2007: 117)

b. Gianni, [del quale C_{REL} [non è ancora stato chiarito [[quanti libri t_{PP}] C_Q
[siano stati censurati t_{DP}.

'Gianni, by whom it has not been clarified yet how many books have been censored'

(*ibid.*)

c. *Gianni, [[quanti libri del quale] C_{REL} [non è ancora stato chiarito [t_{DP} C_Q
[siano stati censurati tDP.]]]]]

'Gianni, how many books by whom it has not been clarified yet have been censored'

(*ibid.*)

(i a) では埋め込み文内に間接疑問文の演算子と関係節演算子のまとまりが収まっている

る。この要素全体を関係節の criterial 位置へ移動することはできず (i c)、これは CF 効果によるものである。一方で、関係節演算子のみを全体から下位抽出した (i b) は文法的であることから、CF 位置から CF 位置へ移動する際には、より小さい要素を移動する手段が認められると考えられる。以上で示したのが、subextraction の例である。

現在考察している例では、前置詞句 in which rotunda が Topic 位置へ移動し、その後名詞句 rotunda が下位抽出を受けて ForceP へさらに移動するとしている。この分析の妥当性の検証については今後の課題とする。

参考文献

- Aissen, Judith. 1975. "Presentational-there Insertion: A Cyclic Root Transformation," *CLS* 11, 1-14.
- Bresnan, Joan W. 1994. "Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar," *Language* 70, 72-131.
- Cinque, Guglielmo. 1999. *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Culicover, Peter W. 1992. "English Tag Questions in Universal Grammar," *Lingua* 88, 193-226.
- Emonds, Joseph. 1979. "Appositive Relatives Have No Properties," *Linguistic Inquiry* 10, 211-243.
- Haegeman, Liliane. 2003. "Conditional Clauses: External and Internal Syntax," *Mind & Language* 18:4, 317-339.
- Haegeman, Liliane. 2006. "Conditionals, Factives and the Left Periphery," *Lingua* 116, 1651-1669.
- Haegeman, Liliane. 2007. "Operator Movement and Topicalisation in Adverbial Clauses," *Folia Linguistica* 41:3-4, 279-325.
- Haegeman, Liliane. Forthcoming. "Evidential Mood, Restructuring, and the Distribution of Functional *Sembrare*," In P. Benincà and N. Muraro, eds, *Mapping the Left Periphery*, Oxford: Oxford University Press.
- Hooper, Joan B. and Sandra A. Thompson. 1973. "On the Applicability of Root Transformations," *Linguistic Inquiry* 4, 465-497.
- Kayne, Richard S. 1994. *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Radford, Andrew. 2004. *Minimalist Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi. 1990. *Relativized Minimality*. Cambridge: MIT Press.

- Rizzi, Luigi. 1997. "The Fine Structure of Left Periphery," In L. Haegeman, ed., *Elements of Grammar*, 281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Rizzi, Luigi. 2004. "Locality and Left Periphery," In A. Belletti, ed., *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures*, 223-251. Oxford: Oxford University Press.
- Rizzi, Luigi. 2009. Some Consequences of Criterial Freezing. Lecture given at the Workshop on Linguistics. Kanda University of International Studies.
- Rizzi, Luigi and Uri Shlonsky. 2006. "Satisfying the Subject Criterion by a Non Subject: English Locative Inversion and Heavy NP Shift," In M. Frascarelli, ed, *Phases of Interpretation*, 341-361, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Rizzi, Luigi and Uri Shlonsky. 2007. "Strategies of Subject Extraction," In U. Sauerland and H. Gärtner, eds, *Interfaces + Recursion=Language?*, 115-160. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Stowell, Tim A. 1981. *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT.
- 遠藤喜雄. 2009a. 「話し手と聞き手のカートグラフィー」『言語科学研究』第15号, 1-24, 神田外語大学大学院.
- 遠藤喜雄. 2009b. 「話し手と聞き手のカートグラフィー」『言語研究』第136号, 93-119, 日本言語学会.
- 梶田優. 1969. 「はめ込み文の構造の仕組み」『英文学研究』第45号, 238-248, 日本英文学会.